

高校生徒会、全国的連携の動きが始まる

——二〇一三年三月全国高校生徒会大会開催の経緯と意義

杉浦 正和

二〇一三年三月、
都内に全国から一五三名の生徒会役員が集まる

二〇一三年三月二十九日に「全国高校生徒会大会」が参議院議員会館の講堂で開かれ、全国の高校、北海道から鹿児島まで二一都道府県の七五校から一五三名（予約ベース）の生徒会関係者が集まった。これ自体が画期的であるが、最も重要なのは、この大会が高校生の発案で始まって全てを高校生が中心となって運営したことである。発案から企画を練り上げ、ネットを通じて呼びかけ、企業から資金などの支援を集め、パソコン借入れや宿泊手配までを含めて、二日間の大会運営を高校生一九名の実行委員でなしたのである。大会の最後に二〇一四年の実行委員を結成し、四月二日〜四日

の第二回大会に向けてウエブを立ち上げて準備を進めている。日本の高校生徒会の歴史は、簡単に言うと政治活動に参加させようとする大学生や組合からの影響と働きかけ、それに対する文部科学省や保護者などからの弾圧、こうした中で生徒会活動の長い間の沈滞の歴史であった。それが、新しいメディアを活用した様々な高校生の動きの一つとして、長い間の生徒会役員たちの願いであった生徒会関係者の全国的交流が、彼ら自身の力によって本来の生徒会活動を模索するものとして実現したのである。

いま、高校生や若者が元気

一部に今の若者が元気でないという声がある。こういう

声は昔から年老いた者が繰り返して言ってきたことであるし、何を期待して若者のどの部分を見るかでこの評価が変わると思うが、とりあえず高校生を中心にした元氣な動きを二つ紹介しよう。「僕らの一歩が日本を変える。」と「Teen for 3.11」という運動／プロジェクトである。

まず、「僕らの一歩が日本を変える。」は、二〇一二年四月に高校生六人が創設した団体。八月に衆議院議員会館において高校生二〇〇名と国会議員による討論イベントを主催し、引き続き一三年三月二十八日と八月五日に三回まで実施し、ニコニコで生放送され新聞やテレビでも報道された。ネット選挙、少子化、日中関係など一〇テーマに分かれて、与野党の国会議員と議論してプレゼンをするイベントである。運営は全て高校生一人の実行委員が行った。現在は、大学生の部と高校生に部分かれて活動を続けている。目的は、一〇代の政治への関心を高めることを中心に、この討論イベントと全国を回って高校生へのインタビューや参院選挙での街頭模擬投票も行って来た。団体目的は「一〇代も政治的な思考力、発信力があることをアピールする（社会発信）、日本の一〇代の政治不信を無くし、政治的関心を高める（きつかけ）、政治について考え意見する一〇代を増やす（人材育成）、一〇代の政治参加の必要性を議論（活動目的の価値）」と発表されている。代表は、青年の政治意識向上をめざす団体である「NPO法人Rights」の理事にもなっている。

次の「Teen for 3.11」は、高校生が二〇一二年四月に設立した「一〇代による一〇代のための一〇代ならではの復興支

援団体」で、八月一と二日に初めて四二名の東北旅行を行なって気仙沼を訪れ、一三年一二月まで五回のツアーなどがボランティアで東北復興に関わったとき、「一〇代が中心となり復興支援ができる環境がない。ならば整えればいいのではないか」と考えて高校生に呼びかけ、現在八〇名ほどで活動する。「一〇代による復興支援のしやすい環境と、次の震災に備え素早く行動を起こせる体制を整える」ことを目標としている。この最初の呼びかけが行われたのが、二〇一一年の第一七回高校生環境フォーラムであった。高校生環境フォーラム自体が「二〇〇二年に発足した、環境問題に取り組む全国の高校生によって構成される団体」であり、七つの加盟高校を中心に教員がアドバイザーとなって日頃の環境活動・研究の成果を社会に発信している。そして、全国高校生生徒会大会の実行委員長である山田君が「Teen for 3.11」の事務局長として広報や会計などを統括していた。

フェイスブックやツイッターなどのソーシャルメディアの登場と、それ以前から様々な団体が高校生に対して、ボランティアや探究的学習を目的にする活動の場を提供してきたこと。この二つの要因が、いま元氣な高校生が少人数であっても全国に呼びかけることを可能にし、高校生だけで運営し活躍する場を生み出してきたと言えるだろう。その結果の一つが、高校生徒会の全国的ネットワークの出現なのである。その意味で、参加する高校生の数が多いとは言えない。今までもいたはずの元氣な高校生が、新しい場によるつながりし、

新しいコミュニケーション・ツールを活用し、対等に大人と渡り合つてマス・メディアを巻き込んで、様々なイベントや活動を行えるようになったのである。

三月二十九日、

テーマ別に分かれてプレゼンに向けた議論

会場は、参議院議員会館の講堂なので事前の登録がないと入れない。一階の奥に広い講堂があり、一〇時からの開催に向けて高校生が多数集まっていた。大きな会場の隅に高校生以外の席が用意され、保護者はおらずに教員が二人だけ、卒業生が数人見ていた。マスコミ関係者は前日二十八日の「高校生二〇〇人×国会議員」の討論イベントほど多くない。なお、二十九日と三十日の様子は「Stream」に映像がアップされている。私が参加したのは二十九日のみで、三十日のプレゼンの様子をこの「Stream」映像によって見た。

最初に、この大会を主催した二人の共同委員長が挨拶する。企画を立案し全力で準備してきた桐朋高校の山田君が経緯を話す。次に、灘高校の南藤君が「楽しみましょう。大会を使い倒してほしい」と主旨を説明する。会場はすでにテーマ別の一四ハウスに分かれていて、知り合いが重ならないようにバラバラにしていたが、既に仲良く語り合っていることを喜ぶ。そして、集まった生徒の学校名が北海道から紹介され、一三名の実行委員が自己紹介する。全員が私立高校の生徒である。南藤君がスケジュールとプレゼンの採点ルール

を説明する。学校を変えるアイデアを出すこと、そのために現状を具体的に述べて、提案や効果を入れたプレゼンを、制限時間七分、一秒ごとに減点で三十日に行う。採点はコンテツ四〇、スピーチ二〇、スライド二〇、チームワーク二〇の一〇〇点満点。ハウスごとの議論をまとめるためノートパソコンが配付されるが、使えるソフトはオープンオフィスなので特殊な表現ができない。確かに翌日のプレゼンを見ると、ほとんど簡単な文章だけで口頭の説明がメインだった。

その後、協賛企業でもあるAO義塾の慶応大三年生齋木氏が自分の経歴を語りながら、大志を抱いてほしい、夢と志がどう違うか、利己と利他のバランスをとるか、政治家になりたいか、君たちエリートなのにGDPや高齢化率を知らないのか、アメリカならば答えられると、かなり高校生の知識の不足を指摘しながら煽る。国が貧しいことの恐さや、難問を解くこと、世界的転換にきているという刺激的な内容の講演であった。氏は、慶応大学にAO入試で合格すると学校から退学させられるという体験を経たことを話して、生徒会が無力であるけれどチャレンジをしてほしいと呼びかけた。

翌日のプレゼンに向けて一四班に分かれて議論を始めた。テーマは七つ、①イベント、②交流、③社会貢献、④運営、⑤IT、⑥学校問題、⑦教育制度だった。テーブルをつけてノートパソコンを一台ずつ置いて議論が行われた。その間に、昼食を班ごとに分かれてとる。三時からは学校ビンゴを行う。ビンゴは二五マスで、班外の人に学校名と名前を聞いていく。班員にビンゴが出た班の順番を、翌日のプレゼン

順としたのである。その後プレゼン準備の話合いを続行し、一七時半にパソコンを回収したのでかなり大変であった。最後に民主党鈴木寛議員が来てかなり長い挨拶をして、二百年ぶりの大転換と言って励ました。次に自民党の佐藤ゆかり議員が現われて少しだけ挨拶した。講堂をとったのは佐藤議員である。遠方から参加した生徒たちは都内の宿舎に泊まったが、参加者の多くは翌日のプレゼンに向けてかなり遅くまで準備しようだ。そのプレゼンは、内容的にも語り方でも非常に素晴らしいスピーチばかりであった。(www.ustream.tv/channel/全国高校生生徒会大会から、過去の番組を運ぶと、開会式やプレゼン、閉会式が見られる。)閉会式の最後に、南藤君が「自分たちは手伝わない」と宣言し二回目の実行委員を呼びかけると、壇上に三〇名ほどの高一生が集まってきた。一四年に向けた準備がここからスタートした。

画期的アイディア実現までの動きと出会い

フエースブックには、共同委員長だった二人の様々な活動の記録が細かく記されている。ここでの説明は、その記録を見て知ったことと、山田君に問い合わせて得た情報に基づいている。まず、山田君が最初の発想を話したのは、全国大会の一年ほど前、桐朋高等学校生徒会総務委員長だった時である。山田君は、二〇一一年二月末に池袋で開かれた模擬国連に参加(各国代表に模擬して英語で討論するプロジェクト、大学生などが参加)して、発言ができなかったために

自信が吹き飛んで、外の世界に挑戦しようと思った。彼はその後、春休みにEF Boston、七、八月にEF San Francisco Fishermans Wharf(短期語学留学)に参加し、その間六月にWorld Scholar's Cup(総合的な教養を競う学生向けの国際大会)東京大会や、八月に生徒シンポジウム夏合宿2012@八王子セミナーハウスや模擬国連関西大会、一月から先に説明したTeen for 3:11へ参加して二月に東北旅行をするなど、様々な活動へ積極的に取り組んでいた。

もう一人の実行委員長であった灘高校生生徒会長の南藤君も同様に様々な活動に参加していた。ディベート同好会を主催しながら日本語ディベート全国大会だけでなく、メキシコで開かれたIDEA Youth Forumという国際大会や海外旅行、国内で開かれたハーバードと日本の大学生による、日本の高校生のためのサマー・スクールHITsなどの高校生プロジェクトである。こうした繋がりの中で山田君は南藤君を知っていた。なお、大会前日に開かれた「高校生一〇〇人×国会議員」の討論イベントでは、南藤君が当日の議長、山田君はスタッフとして参加している。また、山田君は、翌日一日に都立日野高等学校で開かれた「生徒シンポジウム2013」という、一般中高生向けの話し合いイベントを準備して当日も参加した。このシンポジウムは初めて文部科学省が後援した。全国大会具体化に向けて議論が始まったのは、一二年一月三日に開かれた「生徒会大会2012」の後、首都圏高等学校生徒会連盟の仲間である南君と相談してからである。「生徒会大会2012」は、桐朋高校生生徒会を中心に、首都

圏高等学校生徒会連盟や高校生徒会懇談会、K-net、多摩生徒会協議会などの生徒会団体の関係者を集めて、生徒会計など詳しく深い議論をしようと開催されたもので、三二校から一二二名が参加した。生徒会役員の持つべきスキルや、意見を効率的に実現する方法、文化祭と生徒会など、六分野一二議題で話し合いが行われた。その前一〇月半ばに山田君は全国生徒会連盟企画書案を作っていた。「東日本大震災の例にみられるように、地域間でのつながりの強化が現在求められ」るので、生徒会活動を活発化し、各地方に支部を置いて「最終的には生徒会の枠を超えて全国の生徒を結ぶ」ため、年に一度「全国高校生徒会サミット」を開催するとしていたのである。

大きな進展があったのは、一二月二一日東京で南君と共に南藤君と初めて会って話が盛り上がったためである。全国の生徒会関係者を集めるため、山田君が各地の生徒会の集まりをネットで調べて「関西生徒会連盟」の存在を知り、何か知っているかと思つて南藤君にフェースブックでコンタクトしたのがきっかけである。一三年一月四日から二人で大会の広報をフェースブックで始めるなど準備活動が本格化した。ミッションは「生徒会から学校を、社会を、そして日本を変えていく。」とされた。しかし、宣伝に動き出したものの資金や会場手配、リスクを考えると様々な不安がいっぱいある中、二月半ばに偶然知り合ったA〇義塾代表に誘われ、「僕らの一歩が日本を変える。」代表を入れた三人でランチをとって話したのが大きな転機となった。二人の熱い熱意に感

銘を受け、生徒会つながりでOBにあたれというアドバイスを得て、OBなどの関係者に三週間で一〇人強の人々と会い、親身で貴重なアドバイスや資金援助の申し出を受ける。南藤君は様々なついでで地方から多くの参加者を集めるなど、実行委員に集まった多くの生徒が大会実現に向けて努力を惜しまなかった。学校の許可がなくて実行委員に名前の出していない石島君が、一月に初めて出会ってバーコード管理などで山田君を最大限に支えたようである。メッセージのやりとりだけで五千以上、その他スカイプも使って夜通し話し合っていた。並大抵でない努力を高校生たちがしてきたのだらう。そして、石島君は卒業後に生徒会守の運営に携わっている。

準備・運営の様々な苦勞を高校生が独力で乗り切る

二人の共同実行委員長の下、副会長三人と実行委員が四人で、総勢一九人の高校生で二日間の運営と宿泊を入れて三日間全てを仕切ったのである。共催は、一般社団法人日本学生会議所（代表芳賀達也）であった。芳賀氏と関係の大学生に「生徒会大会2012」や様々な生徒会活動で世話になってきたものの、今回の大会では芳賀氏が成人の責任者として付き添ったりプレゼンの審査を手伝ったりしたものの、彼は見守っただけでほとんど指示を出していなかった。実行委員間の打合せは、フェースブックのメッセージやグループ、ネットによるテレビ電話であるスカイプを使っている。現代的コミュニケーション・ツールが高校生の自立的運営と新し



い全国的なつながりを生み出したと評価できる。

会場は、当初麻布学園を借りる予定だったが、高校生の参加に対して顧問の同意書持参条件にされた。このため、条件を保護者承諾のみに切り換えて、日本学生会議所の紹介で佐藤ゆかり議員に急遽メールで依頼し、無料で参議院議員会館講堂を二九日に借りることとなつ

た。三〇日のプレゼン会場は、たまたまキャンセルの出た江戸川区葛西区民館ホールを使った。宿泊先についても当初予定していなかった宿舍を借りる必要が出てきた。全国から集まった中学・高校生には、千円から一万円までの交通費扶助を支給し、テーマ別の議論をまとめるためにノートパソコンを借り入れた。二九日の会場は食堂があったが、三〇日の進行が遅れて昼食時間がとれなくなり、急遽二人で三〇〇個のおにぎりを買いに出るまでしている。宿泊が伴って百人を超える全国的な会議を開くには、準備段階の宣伝や連絡を含めてきわめて雑多で面倒な雑務が無数にあったと思われるが、多くの大人の協力があつたといえ、ほとんど独力で高校生だけで乗り切つたのである。

高校生の一般的な集会は部活動関連の大会である。この場合は、教員顧問が参加し、雑務などもほとんど教員が担っている。生徒会役員の集まりになると、この点をどう考えるのが今回でも問題となったように、今後も大きな問題となる。今大会では、参加資格が「日本国内の高等学校等の後期中等教育を行う学校に在学中の者」、「生徒会」に関する定義を各学校に委ねた形で、「各学校で生徒会活動或いはそれに類する活動に携わった事のある者」とした。原則は個人参加であり、保護者の参加同意書をつけて事故等の責任を負わない形とした。応募が切が三月一五日（金）であり、ネットでは呼びかけた結果一五三名が参加した。その内訳は、中学生が一六名一一％、高一生五一名三三％、高二生八〇名五二％、高三生六名四％で、女子三三名二一％と男子一二一

名七九%、地域は関東五五%、関西二二%、中部八%、九州七%、東北六%で、東京から六七名の参加であった。つまり、関東外からの四五%の参加者は宿泊が前提であった。参加校で見ると二一都道府県の七五校で、私立が大半であり県立・都立が一五校。ただし、有名進学校が大半を占めていた。

次年度の大会を全く新しい実行委員が準備する

当初のプランでは、「全国の生徒会役員を集めて『全国生徒会連盟』を設立」とされていた。しかし、毎年「全国生徒会大会」を開く形で全国組織を作らないこととなり、大会最後に会場で実行委員を募集して準備を進めてきた。東西の共同二委員長の下に、四名の担当部長の他、三五名以上の実行委員が参加している。また、プレゼンの中で提案された、全国の生徒会の情報交流サイトである「おしえて! 生徒会」が、生徒会の下ですでにオープンされて、様々な生徒会からの発信が行われている。分野ごとの投稿データベースがあつて検索が可能であり、理念が「より多くの生徒がより遠くの生徒同士が繋がること」である。(http://oshiete.seitokai.jp) こうして、生徒会活動のノウハウを全国の生徒会の仲間にネットを通じて相互交換し、定期的な大会で直接に会って話し合う形が整えられたのである。個人情報保護や学校の介入等を考慮し、学校名を出さない利用が推奨されている。実行委員のメンバーが各地域で様々な活動を

行つてゆく可能性もあり、その意味で生徒会活動のレベルが徐々に高まることが期待される。

戦後の生徒会活動の歴史でも何度か全国組織を作る動きがあつたが、今回はその道をとらなかつたことが賢明だったと言える。山田君は、その理由をいくつかあげているが、最大理由が生徒会の弱点を逆に利点にするという発想である。この方が「高校生の活動としてはよりよい形で大会が継続」することができるということ。高校生の活動では「団体の設立メンバーの世代は熱い活動が展開され、その世代が引退すると活動が停滞してしまうことが多い」ので、勢いを大切にするため「自分たち」で作りあげること、「一から大会を作り上げていく」形が一番やりがいを感じてふさわしいと。大会最後の呼びかけで南藤君が強調していたのが、自分たちは次の実行委員を手伝わないということであつた。それは、次意味で日本社会がそれなりの豊かさ＝余裕を持ち、強力なメディアツールを高校生に提供するだけのインフラを備えた結果だとも言えよう。

高校生徒会の限界と今後の方向性

今回の動きは、私にとって「晴天の霹靂」であつた。まさかこんな形で高校生たちが全国的な結びつきを、しかも独力で創りあげるとは想像さえしなかつた。この動きを中心に担った山田君からいろいろ情報を得て、経緯をしっかりと記録しておくことが重要な課題だと考えたのである。全国大会と

いう形で進めるといふ方向性はきわめて面白いと思う。ただし、このままで運動の勢いをずっと保てるかに若干の不安を抱かないではない。その意味で、ここで改めて生徒会とはどういうものであつて、どんな弱点があるのか、世界的な動きがどうなつてゐるのかを簡単にまとめておきたい。

戦後の大半の高校生徒会活動とその指導には大きな弱点があつた。いくつかの例外的な素晴らしい生徒会活動が「本来的」であつて、生徒会役員が活発に動けない、一般生徒が積極的に参加しないような生徒会は、文部省や学校の圧力と高校生の無気力などが原因となつて生まれた、墮落した形態にあるといふ見方に縛られてきた。今回の歴史的イベントを成功させた高校生たちにはこうした見方がなかつた。これが成功の大きな要因である。この古い見方には、生徒会が学校における民主主義実現の組織であり、「理想」の日本国憲法を模すべきだといふ幻想がある。

しかし、現実の生徒会執行部は、国家における政府と違つて、権力と言える力を全く持つていない非常に弱い組織ではない。毎年メンバーが入れ替わり、政党のような継続的組織がなく、一般生徒に決議や規則を強制する力が全く与えられていない。生徒会役員となることは、一般生徒にとつて余計な仕事を背負う面倒なことではない。役員となる生徒は、義務感かられて正義感で面倒な仕事を担おうとする、変わった人たちなのである。その意味で、生徒会執行部を強化し学校民主主義を強固なものにするには、学内の代表制を確立して強い権威なり権力なりを役員に持たせることが必要

だろう。ところが、幻想を持つ人たちこそ、生徒総会などという無秩序な直接民主主義に期待するので、こうした堅実に改善してゆく方向が見えなくなつていた。

国際的な動きは、一般生徒の無関心という共通の課題を抱えながらも、生徒代表という形で学校や教育政策への発言権を与える形で動いている。生徒と保護者、教員が参加する学校参加制度こそ、日本のような全生徒が参加する学校行事を持たない国における、代表⇨生徒会役員への権威付けの仕組みと言ふべきなのである。日本でも、学校や教育政策への制度的な発言権を、「子供の権利」条約における意見表明権として生徒集団に与えるべきである。この課題を生徒会執行部とどう関連させるべきかについて、当の生徒たち、全国高校生徒会大会に集まつてくるような生徒から意見を聞きたいものである。

最後に、一四年の四月二日から四日にかけて衆議院議員会館で開かれた第二回大会について簡単に述べておく。今回は、原則宿泊となつて一七八名の生徒が参加した。関東比率はほぼ同じ五六%、女子が三三%と二%増であつた。ほとんどの生徒が徹夜に近い状態で三日のプレゼンに臨み、五テーマで意欲的な現状分析と提案を行った。最後に、全国高校生徒会宣言として、①生徒のため、②生徒の代表、③自主性と学校生活の改善、④学生らしく、⑤広い視野と交流、その成果の還元と発表した。現在の生徒会認識として積極的に評価できる。